

小さな勇氣

中原聖歌

男は歩き続けた。目的地まであとどのくらいかの距離だろうか。夏の暑い陽射しが地面を焼いて、足の裏からも熱が伝わってくる。男は歩き続けた。帽子でも、日傘でもなく、編み笠で暑さを凌ぎながら。

やがて男は小さな町にたどり着いた。あたり一面が田圃で黄色い稲穂が風に揺れている。そろそろ稲刈りの時季だろうか。暫く歩くと町に一つしかない小さな小学校が見えてきた。

こんな田舎でもお盆の時季には盛大な夏祭りを催す。小学校は夏祭りの会場になっていて、今は準備の真只中であつた。男の足はテントが立てられたばかりの本部へ向かった。男は夏祭りに店を出す目的でこの町を訪れたのだ。手続きを済まして夜を待った。

この地域に住んでいて、毎年夏祭りに参加する福島圭吾は落ち着かない様子で屋台を回っていた。隣には浴衣に身を包んだ妹の桃香がいる。圭吾としては早く帰りたいかつた。友達に会うと、毎年恒例の肝試しに付き合わされるだけだからだ。

圭吾は中学二年生、妹の桃香は中学一年生だ。親が屋台の手伝いをしているため嫌でも桃香と行動をしなければいけない。桃香は甘え上手で、既に圭吾からりんご飴を奢ってもらっていた。

(残り四百円か)
夕食を買うぐらいしか残っていない。もともと持ち合わせがなかつたのである。桃香は圭吾の考えていることなど気にも留めずまた何かを見つける。

「お兄ちゃん、あんな店去年あつた？」

圭吾は面倒くさそうに言われたところを見る。

「種屋？」

確かに見た記憶がない。そもそもショッピングセン

ターに行ったとしても花屋はあつて種屋はない。そのお店自体を見た記憶がなかつた。

「一度行つてみる？」
圭吾はそう訊いたが、桃香は既に走り出していた。

「いらつしやい」

店の中には小さな机が置いてあり、その前に一人の男が座つていた。

「どうも」
圭吾は軽く挨拶する。

机の上には幾つかの箱に分けられた様々な大きさの種があつた。色も、濃く黒に近いものや薄く明るいものなど様々だ。

「何ですか、この種」

圭吾は親指大で茶色の種を手を取つた。種にしては重みがある。

「それは夢の種だよ」

男は少し笑いながら答えた。男にしては営業スマイルのつもりかもしれない。しかし、何かを企んでいるような不気味な笑顔だ。

「夢の種？」

圭吾の眉間に皺が寄る。

「そうだよ。願いを込めながらこの種を育てると夢が叶う。それは小さな夢かもしれないし、将来の夢かもしれない」
男は不気味な笑顔を更に深めた。

(何を馬鹿な)

圭吾は馬鹿にしたような目つきで男を見ている。男はお構い無しに机の上の種を説明し始めた。

「右から順に、さつきも言つた夢の種、信頼の種、友情の種、勇氣の種、どれも育てた人を助けるときに花を咲かす」

「何を馬鹿な」

圭吾は男の説明に対しさつき思つたことを口に出してしまつた。

「どうせ気休めだろ。女が楽しむ占いと一緒さ」

「まあまあ、騙されたと思つて育ててみないか？きつ

といいことが起こるよ」

仕方無し一つ手に取る。楕円形の信頼の種は何故か温かつた。何かが起こるわけではないと思つていたが、種の温かさはそんな考えを鈍らせる。

「お兄ちゃん、こつちが良い」

桃香は勇氣の種を指差して言つた。勇氣の種は他の種に比べて小さく、くぼみがあつた。

(仕方ないか、桃香が怒ると面倒くさいし)

桃香は言い出したらきかない。圭吾は諦めたように財布をとり出した。

「じゃあこれを下さい」

「はいまいど。三百円になります」

「えっ！ 一つ三百円？」

結局圭吾の手元には小さな勇氣の種と百円玉が一つ残つた。

次の日、圭吾は倉庫から植木鉢を取り出した。小学生の時に朝顔を育てたやつだ。小学生時代よく物を落とす子供だつた圭吾の植木鉢は、案の定割れていた。自分ではなく、桃香の植木鉢を使うことにした。植木鉢に土を入れた。その上に種を置き、土を被せた。

「お兄ちゃん、やり方違うよ」

いつの間にか来ていた桃香が言う。

「小さな種だと被せる土は少しでいいから」

そう言うのと被せすぎた土をどかす。圭吾には植物を育てるための知識など無かつた。

種の植え付けから約二週間が経ち、夏休みが終わつた。そのたつた二週間で勇氣の種は大きく育ち、花が咲いた。二人は花のことを「ゆう」と呼んで大切に育てた。最初はあまり乗り気ではなかつた圭吾だが、育てているうちにだんだんと楽しくなり、植物に対して親近感が湧いてきた。

もうすぐ始業式が始まる。二人は中学校へ向かつた。

「おはよう」

「おはよう、福島。お前夏祭りでは会わなかつたな。肝試しできなかつたじゃないか」

同じ部活ではない友達はその事を言ってくる。圭吾は苦笑いを浮かべながらやり過ぎた。

「圭吾、おはよう」

そこに同じ野球部部員の川上雄也が来た。

「あ、雄也。おはよう」

雄也は野球部のキャプテンだ。

「今日からまた部活再開だから、頑張ろう」

夏休みの終わりには三日ほど休みが入る。これは宿題を終わらせていない生徒にとって恵みの休みだ。そして夏休みが終わった二学期初日から、野球部の活動は始まった。

圭吾の守備位置は捕手だ。夏休み中に三年生が引退して新チームになったが、正捕手ではない。二番投手西枝田隆介の専属捕手である。何故二番投手に専属の捕手がいるのかと言うと、第一に球が速い。その速さは、エースの松浦彰仁とは比べ物にならない。捕れるのが圭吾しかないからだ。しかも単に速い球を捕れば良いのではない。たまに思わぬ方向にすっぽ抜けるのを承知で、対応していかなければならなかった。圭吾はどんなに速い球でも捕り、素早い反応でワイルドピッチを防ぐことから、専属捕手に指名された。ちなみにキャプテンの雄也は二塁手である。

「今日は西枝田休みか」

圭吾は辺りを見回して呟いた。クラスが違うので、学校を休んでいるのか部活だけを休むのかはわからない。久しぶりに会えると思っただけに、少し落胆しながら練習をしていた。するとそこに監督がやって来て圭吾を呼んだ。

「何ですか」

圭吾は嫌な気がした。自分だけが監督に呼ばれることはあまり無かったので、怖々と監督の前に立った。

「実はお前とバッテリーを組んでいる西枝田のことなのだが、今日の朝職員室にやって来て部活を辞めたいと言ってきた。理由を訊いたら黙り込んでしまっただけで話さない。だから理由が分かるまでは認めないと言おう事で、退部届け用紙は渡さなかったのだが何か心

当たりはないか？」

「えっ？ 西枝田が？」

予想とは大きく違う話だが、圭吾を戸惑わすには十分すぎる内容だった。部活が休みに入る前は誰とでもよく話して楽しんでやっていただけに、今の話は信じられるものではなかった。

「い、いえ……。何も知りません」

圭吾の返答に監督は深い溜め息をつき、

「そうか、まあ言ってきたのは事実だから、気に掛けてやってくれ」

とだけ言うと言ってしまった。

「ゆう、何でだと思おう？」

「どうしたの、お兄ちゃん？」

桃香は様子がおかしい圭吾を心配そうに見ながら言った。

「何でも無いよ。お前には関係ない」

「ふーん、なら良いけど。ご飯だから速く来てね」

桃香は台所に走って行った。圭吾は立ち上がったが、どうにも食事をやる気分にはなれなかった。

「お母さん、ちよつと出かけてくる」

「ちよつと圭吾、今何時だと思っているの」

母の声も聞かずに圭吾は走りだしていた。向かうは西枝田隆介の家である。時計の針は午後八時を指していた。

「西枝田いるか、西枝田！」

圭吾は家の前に立つと二階の窓に向かって叫んだ。

影がゆつくりと動いて窓を開けた。

「西枝田！」

「福島……」

圭吾に対して、隆介の声は低かった。悲しそうな声だった。

「降りて来てくれ、話がある」

圭吾は隆介をつれて近くの公園に行った。ベンチに腰をかけると風を感じた。夜風は冷たく二人に吹き付ける。

大人だったらこんな時温かい缶コーヒーでも持ってくるのだろうか、

(そんな気の利いたことは出来ない)

と圭吾は一人で思った。言い出しにくいので無駄なことを考えたが、時間だけが過ぎていくのも耐えられない。圭吾は思い切つて口を開いた。

「どうして部活を辞めたいなんて言い出すのか俺には理解できない。理由があるなら教えてくれ」

その後は会話が続かなかった。隆介は話そうとしないう。圭吾はそんな隆介を見ていてイライラしてきた。どうして寒い中ここまで来たのだろうか。解決の糸口を掴むわけでもなく、ただ帰るのはどうしても納得できなかった。

「どうにか言えよ！ そんなに俺は頼りないのか！」

「頼りなくはないよ。ただ、もう決めたことだから他人に割り込んでほしくないだけだよ」

「他人って何だよそれ。バッテリー組んでるくせに相談も無しかよ！」

圭吾は隆介のいつもと大きく違う態度に痺れを切らした。そしてその日は、とうとう重要なことは何一つ聞けずに家に帰った。

次の日もその次の日も同じような会話しかできなかった。そのまま数週間が過ぎた。圭吾は毎日同じ時間に行ったが、隆介は公園までは来るが何も話さなかった。学校には来ているようだが、廊下で会うと避けるような態度をとる。圭吾はだんだんと、隆介の家に行くのが嫌になってきた。どうして何も聞けないのに寒い中公園に行くのだろうか、馬鹿馬鹿しくなった。

ある日圭吾は隆介の家に行かず、家族とともに食卓を囲んだ。

「あれ？ お兄ちゃん、今日は行かなくて良いの？」

桃香は不思議そうに尋ねる。どこに行っているか知っていないわけではないが、圭吾が悩みを抱えていることぐらいは態度で分かっていた。その日は雨が降っているわけでもなく風が強いわけでもない。

「良いよ。別に」

そっけなく答える。圭吾は天候は問題ではなかったが、桃香はそれに気付きはしなかった。

「ところでお兄ちゃん、お兄ちゃん今日ブルペンで投げてなかった？」

ふと、学校で見たことを思い出して言う。

「うん……。投げていたな」

「なんで？ 投手は一年生の子も入れたら三人いるのに」

「……。何でだろうな」

もうすぐ練習試合がある。当初は隆介が投げる予定だった。エースの松浦彰仁が用事で休むことになってからだ。一年生の投手はまだまだ練習を始めたばかりで、少しも形になっていなかった。慌てた監督は二番手投手として圭吾を指名した。肩が強く、小学生時代に少しだけだが経験があるのが理由だった。しかし圭吾にとっては、選ばれて少しも光栄ではなかった。部活内で隆介が自然に消されているような、妙な感覚があった。誰一人練習中に隆介の名前を口にしない。悲しかった。

夕食を終えると圭吾は桃香と二人で勉強部屋へ行った。そこには色鮮やかに咲き誇る勇気の花があった。

「ゆうは、いつでもきれいだね」

「うん」

「お兄ちゃん覚えてる？ ゆうは育てた人を助けるときに花を咲かせるって」

「ああ、そういえば」

忘れていた。ここ最近ゆったりとした気持ちで花を見てはいなかった。

「だから桃香は祈るよ。どうかゆうがお兄ちゃんを助けてくれますようにって」

「桃香……」

今は素直に嬉しかった。時折憎たらしい時もある妹だが、やはり自分の唯一の兄妹だと思ふ。本当に大変で助けて欲しい時は、誰よりも頼りになる相談相手だった。

「ありがとう」

圭吾の素直な言葉に桃香は照れくさそうに笑った。

「お兄ちゃん、種を植えてたった二週間で成長して花が咲いたのは、やっぱりお兄ちゃんを助けるためだよ」

桃香はそう言うとうゆうの花の下あたりにある袋状の物を圭吾に見せた。圭吾にとっては今まで見たことのない物だった。近くによつてじっくり見てみる。

「これ、何？」

「分からないけど、多分この袋の中には種が入っていると思うよ」

「種？」

「うん」

桃香は笑顔で答えると袋状の物を指で弾いた。弾かれた袋状の物は、ポンツと音を立てて中から小さな粒が飛び出してきた。粒は吸い込まれるように圭吾の掌の中に入ってきた。それはいつぞや見た小さく丸い種で、前と変わらずくぼみがあった。

「やっぱり！」

桃香が嬉しそうに歓声をあげる。

「すごい、もう種まで出来ていたのか」

圭吾も驚きと興奮で落ち着かない。二人はひとしきり騒いだ後、落ち着きを取り戻した。

「お兄ちゃん、毎日行っていたのに急に止めるのは良くないよ」

桃香は急に話し出したが、圭吾は何のことかすぐ分かり下を向いた。自分の中でもその思いは渦巻いていたからだ。

「でもあいつは何も答えない。どれだけ俺が叫ぼうと、声が届かない」

圭吾は自分に言い聞かすように答えた。だから行っても行かなくても一緒だと思いたかった。

「根性だけはあるお兄ちゃんが根負けしてどうするの！ 声が届かなくても、叫ぶだけ叫んで気がついてもらえたら良いと思うよ。はっきり伝えなよ、自分の思い。勇気を持って！」

「勇気……」

二人は圭吾の掌の中にある種を見つめた。これが本当に力をくれるのなら、どうにかなるような、そんな気がしてくる。

「ありがとう桃香、もう一度行ってみる。心開かせてやる」

「さすがお兄ちゃん、頑張ってる」

二人は顔を見合わせて笑った。兄の笑顔が本物になるようにと、桃香は願った。

翌日午後八時。圭吾はいつものように家を出た。隆介と公園に来ると、圭吾は素早く隆介の手に勇気の種を握らせた。

「何？」

隆介は不思議そうにしているが気にしない。

「西枝田、俺は本心が聞きたい。何で辞めようと思っただのか、聞かせてくれないか？」

手を痛いぐらい握ってしっかりと目を見て言った。手を振りほどこうとしても出来ないことに困った隆介は視線を逸らした。しかし握らされた勇気の種からは、打ち明けるようにと促す不思議な力が感じられ、少しずつ話し始めた。

「夏の中体連、二回戦で大敗したのを覚えているよな？」

「うん」

「あの時、先輩達が頑張って取った先制点を一球で無用なものに変えてしまった。僕はさんざん打ち込まれて先輩達の夏を終わらせてしまった」

「……」

圭吾もその日のことはしっかりと覚えている。この時はまだ専属捕手ではなかった圭吾は、ベンチにいた。そこで声を出してただけだが、隆介が打ち込まれた時の空気は決して良いものではなかった。

「あの時思った。プレッシャーに弱い自分がマウンドに上がって良いはずが無い。野球なのに一人で戦っている感じだった。多分敵は……、対戦相手ではなくて自分自身だったのだと思うけど、もうあんまり覚えていない。思い出したくない」

「……」

どう言ってもあげれば良いのか、言葉が出てこなかった。一つだけ分かったことは、隆介が前を向けていな

いことだ。

「そうか、負けたのか」

「何を今更。前から負けたことは分かっていただろ。」

「結果はもう夏に出ている」

「試合じゃないよ」

「……？」

「自分にだよ」

「えっ！」

圭吾はそれだけ言っただけでベンチから立ち上がった。これ以上何かを言えば怒らすか泣かせるかのどちらかだと思っただけからだ。

「さてよ！」

隆介は困惑の表情を浮かべながら呼び止めた。圭吾は立ち止まったが振り返らなかった。

「どうして、僕の家に毎日来た、ほっておこうとは思わなかったのか？ 勝手にしておけと思わなかったのか？」

「思っただよ。でも俺は根性だけはあるからな、意地の張り合いには負けない。西枝田が意地を張るならこっちも張り続けるだけだ」

（全然優しく無い言葉だな）

自分で言いながらもっと言葉を選べないのかとすぐに悔やんだ。しかし不思議なくらい言い続けていた。

「他の人が西枝田のことをほっておこうとしても、俺にはできない事情があるんだ。次の練習試合まで西枝田が休み続ければ投手として投げさせられる。それだけは勘弁してほしいな。俺は捕手だ。西枝田専属の」

「……」

隆介はおかしくなってきた。どうして悩みを話してこんなことを言われなくてはいけないのだろうか。しかしバッテリーを組んでいる仲だけに、それが圭吾の思いやりの言葉だと分かっていた。

（不器用だな）

そう考えると人が必死で話しているのに、笑いを堪えるのが大変になってきた。

「俺は試合で投手なんかやらない。捕手がやりたいだけだ。この意味わかるだろ？」

「ははは、あははは」

ついに笑ってしまった。

「何で笑う！」

「分かったよ。福島が僕のことをどれだけ大切に思っているか伝わって来た。戻って来いって、そう言いたいんだろ？」

不器用だが温かい言葉の中には、確かに自分への思いやりがあったのだと、隆介は深く感動した。そして短い言葉にこそ、大切な意味が込められているのだと。

「分かったよ。福島が言うようにあの夏の試合にずっと囚われていた。自分に、負けていたと思う。自分自身もつと強くなりたいといけないな。また囚われることが無いように」

「大丈夫だよ。西枝田は一人じゃないだろ」

日曜日。練習試合の当日になった。圭吾の守備位置は捕手、もちろん投手は隆介である。

朝家を出る前、勉強部屋にあるゆうの前に来た。「ゆう、ありがとう。今日この日を幸せな気分を迎えられるのは、ゆうのおかげだ」

本当にゆうの力なのか分からないが、圭吾はその力を信じていた。小さな種に込められたほんの小さな勇気が、隆介を助けたのではないかと思っている。その思いから出た、心からの感謝だった。窓から入った風でゆうが揺れる。まるで頷いてくれているような、そんな気がした。

「プレイボール！」

試合が始まった。圭吾たちは後攻。隆介が振りかぶって投げる。ズバツと外角低めにストレートが決まった。

「ナイスボール！ 球走ってるよ」

今日の隆介は気分も乗っていて調子も良かった。

次々とアウトを取って一回の表が終わる。

「隆介、良い調子だな」

「おう。圭吾もバッティングで見せてくれよな」

二人はあの日以来お互いのことを名前で呼ぶようになった。

なっていた。

圭吾は初球をバットの芯で捉えて、センター前に運んだ。歓声が上がった。

（まだ一回の裏。もっと歓声は聞ける）

圭吾は嬉しそうに笑う。試合はまだ始まったばかりだ。